

北 杜 夫 著

マンボウ雑学記



岩 波 新 書



boreas

eurus

北 杜 夫 著

マンボウ雑学記

岩 波 新 書

zephyrus

perurus

北 杜 夫

1927年東京に生まれる

1952年東北大学医学部卒業

現在一作家

著書—「幽霊」「夜と霧の隅で」
「検家の人びと」「酔いどれ船」
「どくとるマンボウ航海記」
「どくとるマンボウ昆虫記」
「どくとるマンボウ青春記」
「さびしい王様」
「父っちゃんは大変人」
「北杜夫全集全15巻」他

マンボウ雑学記

岩波新書(黄版) 167

1981年9月25日 第1刷発行 ©

1982年9月10日 第6刷発行

定価 430 円

著 者 きた北 もり杜 お夫

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式岩 波 書 店 会社

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

はしがき

これは伝統ある「岩波新書」にはふさわしくない本である。むしろ、中学生や高校生むきのエッセイといってよい。

「日本について」は、あえて今の中学校、高校の日本歴史の教科書にはぶかれている古い日本の伝説や作りごとの多い国史をいくらか述べてみた。私の小学校、中学校当時は、なにせ軍国主義時代のことであるから、神国日本が強調され誇張された教育を受けたものである。敗戦後の教科書では、それらのことがこれまた誇大に抹殺されたり片隅に押しやられてしまっている。何事も極端なことは宜しくない。それに、今の若者はすばらしい一面も持っているが、マンガばかり読む人々も多く、おそらく「古事記」や「日本書紀」などに目を通すことはずっと少なくなっているであろう。

私は口伝えの神話から、信用できぬ古人の創作をもいくらかは記した。同時に、間違っている点も少しは述べた。日本人は、たとえばインチキなところが多いとしても、これらの伝承を少しは知っておくべきだと考えたからである。アナクロニズムと言われようが、自国の神

話や言い伝えをないがしろにしてはいけなないと私は考える。どの民族にも言えることだが、神話というものはその民族の魂の遍歴でもあって、すこぶる大切なものなのだ。それに加えて、いくらかの故事来歴、珍説をもつけ加えた。

「お化けについて」は、私の幼兒的精神から少しはくわしく書いた。妖怪変化へんげというものは、すべて迷信ではあるが、俗信を多く持つ民族は少なくとも大らかでユーモアにも通ずるものだ。私は思っている。その証拠に、江戸時代ではお化けがもっとも活躍する。江戸時代は燦然たる文化が咲き誇り、かつユーモア精神が溢れていた時代であった。狂歌に至っては、日本人が苦手とするエスプリ精神をも發揮している。

それが明治となって、シリアスなものばかりが尊ばれ、せつかく日本人が有していたユーモアは軽んぜられるようになってしまった。これは未だに尾を引いている。わが国の文壇では、読んでいて下手に笑ってしまうような作品があると、これは三流作品だと決めつける風潮がなおかつ残っている。

「看護婦について」と「躁鬱について」は、まあ私流の雑文でフロクのようなものである。ただ、後者には医者であると共に患者でもある私の体験を多く記した。本文中にもあるとおり、私は医者をやめてかなりになるので、この病気について相談なさるのは現役の専門医に

して頂きたい。

私のような無学な男が、あえて「岩波新書」を書いた理由はもう一つある。ゲーテは、「傑作ばかり書く人間が、この世のどこにしようか」と言った。作家にとっては駄作もまた必要なのである。これは本にしても同様だ。「岩波新書」は名作ばかり多く、駄本は甚だ少ない。貨幣にたとえば、ほとんどすべてが良貨なのである。私はその良貨の中に、一つくらい悪貨があってもよいと判断したからこそ、無謀にもこんな本を書いてしまったのだ。悪貨をあつかっていると、良貨の本当にいいところがわかってくる。良貨ばかりあつかっていると、良貨と悪貨の区別すらわからなくなってくる。

これは決して反語ではない。本当にそうなのである。また、現在は悪貨が良貨を駆逐する時代でもある。日本の歴史はかなり古い。アメリカのような若い国とは違うのである。そのアメリカも、ようやくにして病んできた。病気になることは、そこから何物かが生じて来、むしろ必要なことである。自然は病んで精神が生れる。

日本人は草食民族としてかなりの年代を過してきた。当然、過去にもっと病んでいるはずである。また、いつまでも草食ばかりしては、肉食人種には体力的にもかなわない。それらの点から、この本は手軽なフライド・チキンとして、若い人に読んで頂ければ幸甚である。

なお、参考にした書物、読者がなお深く知りたいたいと思われる書物のいくらかを記しておく。
高木敏雄著『日本神話伝説の研究』、藤井尚治著『奇説新学説考』、鈴木友吉著『日本神話』、
三好文夫著『アイヌの歴史』、清野謙次著『日本人種論変遷史』、日本文学研究資料叢書『日
本神話』、藤沢衛彦著『伝説』、前田保夫著『縄文の海と森』、清野謙次著『日本原人之研究』、
佐口克明著『日本国以前』、清野謙次著『日本石器時代人研究』、東京人類学会編『日本民
族』、植原路郎著『日本書物原誌』、井上円了著『妖怪学講義』、江馬務著『おばけの歴史』、
山室静他著『妖怪魔神精霊の世界』、日本風俗史講座『妖異風俗』などが主なものである。
各氏に対して厚く御礼申しあげたい。

昭和五十六年三月八日、午前四時。

著者

目次

第一章	日本について……………	一
第二章	お化けについて……………	五
第三章	看護婦について……………	一三
第四章	躁鬱について……………	一七

第一章 日本について

1

私は、自分で日本人であると思っっているし、しかも別にホッテントットの血もまじっていないらしいから、ピュアな日本人であるといつてよい。

私が祖国、日本のことを、客観的に意識したのは、いわゆる「マンボウ航海」のときであった。

照洋丸という六百トンの水産庁漁業調査船に乗りこんで、生れて初めて日本を離れ、本や映画だけで知っている外国へ行くという期待と、わくわくする胸の動悸どうきは、とても現在の人々には理解できないであろう。

当時は、留学するとか、商用のためにでかけるとか、何か特別な事情がなければ外国旅行は許されていなかった。まだ一般の民間人は海外旅行はできない時代であった。五百ドルの棒で誰でも出かけられるようになったのは、三年ほど経ってからであったろう。もちろん、VIPは別であったが。

船医というものは、病人が出なければ閑ひまである。初めは、どんな薬が積みこんであるか調

べたり、注射器を消毒したり、乗組員からいろんな海の話の話を聞いたり、しょっちゅうデッキに出かけていって操舵そうたする有様を見学し、またレーダーのぞを覗きこんだりして、けっこう忙しかったが、インド洋に出るころには、私はほとんど閑人ひまじんであった。

そこで、毎日のように、世界地図を眺めて長い時間を過した。これから行くアフリカ西北海岸近くにあるヴェルデ諸島とか、ヨーロッパの国々を飽かず眺めて過した。日本製の地図であるから、日本は赤い色をして、ごくごく小さな島国としてぽつねんと位置していた。

その赤い小さな島を見てみると、私は、自分が日本人であるのに、これまで日本のことをどんなに知らなかったかということをつくづくと感じ、反省と羞恥しゆうちの念に顔をあからめた。

私が高校生のころは敗戦後の困苦に満ちた食糧難の時代であったし、大学時代は小説めいたものを書きだしていたから、せいぜい私にとっては第二の故郷である信州の山へ登りに行くくらいで、ほとんど旅をしていない。小学生時代の修学旅行には、私は腎炎じんえんを病んだあとだったので参加せず、奈良も京都も知らなかった。

また、中学生のころ、ことに神代時代は神格化され美化されインチキでもある日本の歴史は習ったし、古典もいくらか習ったが、もうほとんど忘れてしまっている。

「帰国したら」

と、私は痛切な後悔の念にとらわれながら思った。

「少し、日本のことを勉強しよう。なんといっても、ぼくは日本人なんだから」

しかし帰国すると、下手な小説を書いたり、バカげたエッセイを書いたり、或いはパチンコをやるのに忙しく、ろくすっぽ日本のことを勉強しようとはしなかった。

私がようやく、新しく中学校に入学したような気になっていくらか勉強しだしたのは、なんと^{よわい}年齢四十歳を越した頃からであった。「四十にして^{まど}惑わず」というが、大いに惑って古本なども買いこんだ。そして、^{まど}年齢五十三歳にして、ついに日本のことをごくわずか書く気になった。

耶馬台国^{やまたい}のことについては、最近一種のブームで、さまざまの本が出されており、誰でも知っていることだから、私はむしろ日本という国家が成立したという伝説のときから、記そうと思う。

この国家については、私の少年時代は、殊更に神国日本の尊厳さを教えられたものであった。だが、敗戦後の教科書からは、それらの怪しげな史実はまったく抹殺されてしまった。間違いを正すのは良いことである。しかし、どんな国家にも神話があり、それは誤りであっ

ても誇張されたものでも、それなりに意義があると私は思う。今の子供たちがそういう神話をまったく知らずに成長してゆくのも、これまた偏りかたよりすぎているのではなからうか。それゆえ、私はまずアナクロニズム的日本史から始めたい。

先に、小さな島国と書いたが、その島国はほそ長い。また日本という島国は、本土だけでも千二百以上の小さな島を持っている。

それゆえ、大八洲おおやしまという名称が生れた。ヤとは、数多きことの形容である。大がついてくるから、大群島とでも私たちの祖先たちは思っていたのだらう。

豊葦原瑞穂国とよあしはらのみずほのくにとは、誰でも知っているように、稲の豊かに実る国の意だが、葦という言葉は、稲の属する禾本科かほんの植物を総称したものである。現在の都会人には、稲を見たこともないという人がいる。私の娘が行っていた公立小学校では、校舎の裏庭に鶏小屋もあったが、ほんの六畳ほどのコンクリートの囲いの中に土を入れ、稲を栽培していた。科学班の実習だという。都会人には、「イネ」という植物は珍しくなってしまった。

日本はまた、葦原中あしはらのなかつくに国とも呼ばれた。農業に適した多くの国々の中心にあたる国という意味である。ナカツクニは、外国つまりトツクニに対する称とえ方だ。

細戈千足国くわしほこもたるのくにつまり、武器がたんとある強国の意である。戈ほこは武器、千足は数の多いこと、

細は精妙なことを表現する言葉だ。

大和国は、説明も要らぬだろう。上代の生活は大和にゆかり深く、この地名を日本を表わすのに使った。

言挙せぬ国。さまざまなことを取りあげて、いちいち文句、理屈を述べぬという意で、言行一致の国というわけだが、これはゆかしいようではあるが、現在の日本人ですら、イエス、ノーをはっきりと言えぬ民族になってしまった。ことに、なかなかノーとは言わぬ。外人に對して、はっきり「ノー」と言えぬのは困ったやからと言うべきだ。なぜ、外人にはペコペコするのか。サン・オブ・ア・ビッチ、ドロップデッド、シット、キス・マイ・アス、等々の罵倒語くらい覚えて、或るときはアメリカ人と喧嘩をすべきだ。ちなみに、「売女の息子め」は、略してSOBと言う。サン・オブ・ア・ビッチと言うと、相手にわかってしまうからだ。もちろん、当人とやりあうときにはあからさまに言ってもいいが、女性の多いパーティーなどでは、その嫌っている男の友人などにむかって、

「あいつは、SOBなんだよ」

といったふうにする。

ロシヤ語の罵倒語はピチダ、サバーク、ヨツポイマーチなどで、フランス語のありきたり

の悪口は、ケル・コーン、ケル・イディオ、パル・ディユ、メルドなど、ドイツ語ではシュバインフロント、トート・ウント・トイフェル、フンツフォット、ドゥンメル・カールなどが使われる。あまり悪口言葉を覚えると、元気のよい若者が外国へ行つて、喧嘩ばかりするとこれまた困るので、このくらいにしておく。

余談に入りすぎた。

また、言霊ことだまのさきわうくに幸国ことだまのさきわうくにという名称がある。これは、言葉に神秘的な霊力が宿り、めでたい言葉を唱えれば吉事を招くという信仰から発生した。同時に、言葉に無駄がないということ、良い言葉を用いる国は栄える、言葉に霊力があるという意もこめられていた。

浦安国うらやすのくに。文字どおり、心安らかな国のことをさす。

秋津洲あきつしま。アキツは蜻蛉とんぼのことで、大和の国の緑こき山々、青田のひろがる光景を、「アキツのとなめのごとくにあるかな」と神武天皇が国見くにみをして宜のたまわったことから起ったという。臀となめ帖ととは、トンボの雌雄が交尾して互いに尾をふくみあい、輪わとなって飛ぶことをいう。ちなみに、日本は南北に長いので、小さな島国のくせに昆虫の種類はあんがい多い。トンボもまた多く、ムカシトンボという古代のトンボに似たものもある。ムカシトンボは、私が中学生のころは高尾山などにいたものだが、今その数はずっと減少してしまったことだろう。

日本ひのもと。ここで、日本という名が登場する。「日出づる処の天子書を日没する処の天子に致す」という、聖徳太子が隋国ずいに送ったかの名高い文書に記された。つまりわが国はヒノモトで、中国はヒクルルクニと言ったのである。

倭やまと。これは中国の造語である。倭とは、「東方海上の国に住む小人」の意がふくまれている。ヒノモトに日本という文字を当てたのは、奈良朝初期以後のことであった。ヒノモトをヤマトの枕言葉として用いたこともある。

もとより、わが国を日本と称することの起源については諸説がある。

「これを外邦より伝われるもの」としているのは、「日本書紀」「承平私記」「釈日本紀しやくにほんぎ」などである。「日出づるところに近きが故に此の字を充てたるもの」と言っているのは、北

畠親房はたけちかみさきやうの「神皇正統記」や一条兼良いちじょうかねらの「日本書紀纂疏さんそ」である。

本居宣長もとおりのりながは「国号考」の中で、「孝徳天皇のとき新あらたに異国に示さんために建てたる号なり」と記し、伴信友ばんのぶともは「中外経緯伝」に「韓人の称する所なり」と書いている。

「東国通鑑」の新羅文武王十年八月の条には、「倭国更号テニ日本ト一自言近ニ日ノ所ヲ出以レ為レ名」とある。これは天智天皇の九年に当る。

ヒノモトから、ニホンとなり、ニッポンとなってゆくのだが、昭和九年三月二十二日、文